令和２年度企画展示

# 今、街の成長を振り返る時

## 武村徳松・内田静馬　作品展

　縁あって東京からやってきた武村徳松氏のまなざしがとらえた近代桶川の姿。そして、桶川に生まれ、東京で学び、高田（新潟県）、下関（山口県）と暮らしの場をかえながら創作を続け、桶川に回帰した内田静馬氏。

　二人はともに桶川市民の芸術文化活動に貢献してくださった忘れられない方々です。

〔企画展示期間〕

**令和２年11月１日から12月20日まで**

### 武村徳松氏と水彩画

　徳松氏は、明治23年（1890）に東京府下の板橋に生まれ、19歳の折、旧中山道桶川宿で旅館を営んでいた武村家を継ぐために桶川にやってきました。

　異郷ともいうべき桶川にあって、その風景に向き合い、心の友というべき画帖を開いて水彩画を描きました。

### 内田静馬氏と木版画

　明治39年（1906）に旧川田谷村に生まれた内田静馬氏は、東京高等工芸学校を卒業した後、新潟県高田市などの工業学校に勤めながら木版画の制作を続け、作品をパリ装飾美術館に出品されています。

　戦時中に川田谷に帰郷し、平成12年（2000）に亡くなるまで創作を続けました。

桶川市歴史民俗資料館

# 武村徳松氏と水彩画

桶川の中山道を歩くと、今も宿場桶川のたたずまいを残す建物を見ることができます。その一つに、幕末に建てられた旅籠を引き継ぐ武村旅館があります。

先々代のご当主、武村徳松氏は、旅館経営のかたわら、明治、大正時代にわたってたくさんの水彩画を描いています。カメラが一般に普及していない時代。徳松氏の水彩画は、過ぎ去った時を生きた人々が心にとめたであろう桶川の光景を色あせることなく今に伝える作品であり、近代桶川の姿を知る貴重な資料でもあります。

1　スケッチブック

## 風景を求めて

武村徳松氏は明治23年（1890）に東京府下の板橋（旧板橋宿）で生まれています。郁文館中学に通っていた16歳頃より絵筆を持ち始めます。

徳松氏が当時の桶川町に来たのは、19歳の折、旧中山道桶川宿で旅館を営んでいた祖母の跡を継ぐこととなったのがきっかけでした。

また、旅館経営の傍ら、桶川尋常高等小学校の代用教員として約４年間にわたって児童に図画を教えています。後年、徳松氏は、このころのことを次のように語っています。

「桶川に来て、友だちもなく、遊ぶ相手もなかったので、町内を回って絵を描いていました」（埼玉新聞　昭和45年12月15日）

徳松氏は、心打たれる風景を探す旅を、ここ桶川から始めたのです。

5　川田谷荒川

6　太郎エ門

3　領家土手

4　元宿（北本）

7　大雲寺

## 徳松氏のまなざし

東京で育った徳松氏にとって異郷ともいうべき桶川にあって、その風景の中に非日常的な感動を見いだそうとしていたまなざしは、次第に自らが暮らす町に向けられていきました。

すると、徳松氏は、中山道に面する表通りの賑わいを離れて町並みの裏側にたたずみ、人びとの暮らしに静かなまなざしを向け始めます。日々の暮らしを物語る裏庭の光景の中に心打たれる美を見いだしたのでしょうか。

11　武村裏

18　大山村 橋戸

17　麻ヤ裏

14　吾家

12　桶川駅通り

15　吉田や裏

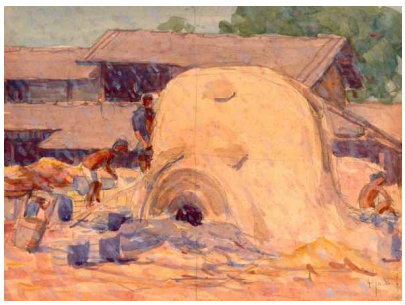
16　牛や

## 徳松氏と新しい表現の模索

水彩画の普及に努めた大下藤次郎は、明治44年（1911）に41歳の若さで没します。この頃から日本の美術界の動向には大きな変化が見られるようになります。

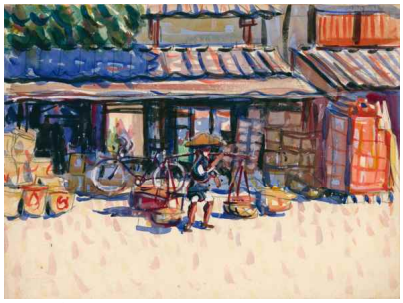
文部省美術展覧会では、水彩画は劣勢となり、しだいに油彩画中心の画壇が形成され、近代美術の主流となっていきます。同時に、芸術家の個性に絶対的な価値を認める傾向が強くなり、画家が求める美の対象も大きく変化していきます。

この流れを受けてか徳松氏の絵も変わっていきます。率直なまなざしでとらえた風景を水彩の透明感をもって描く当初の画風が消え、強い色彩の対比や点描などの新たな表現を模索するかのような作品が目立つようになります。



24　五丁臺

25　西裏ノ上



21　前ノ八百桂

22　巣瀬裏

20　前ノ八百や

### 参考.　大正期の水彩画

大正３年（1914）に第１回二科会展が開催され、大正期を代表する時代の寵児ともいうべき村山槐多が《庭園の少女》を出品します。

彼の水彩画は、青と赤の色彩を基調として太く強い線による大胆な筆致で描かれ、強烈な色彩の中に陰影をたたえる巧拙を超えた強い個性をもっています。そして同年、彼の作品が『みづゑ』に掲載されています。

この頃から、徳松氏の絵も、青を多用し、強い陰影表現がみられるようになります。

庭園の少女

『水彩画 みづゑの魅力 明治から現代まで』より

## 徳松画の新たな魅力

大正期に入って、やや極端ともいえる筆致をもって新たな表現を模索した徳松氏ですが、大正８年（1919）に画期となる二つの作品を描いています。

ともに残雪を伴うことからほぼ同時に描かれたであろう騎西屋と村宗旅館をそれぞれ描く２枚の作品は、２月の雲一つない青空の清々しい空気感が見事に表現されています。

大正期当初に試みた油彩画に影響された極端な筆致が影を潜めながら、さりとて目前の風景を透明な水彩によって繊細に描くことに終始するばかりではない、徳松氏がたどりついた画業の到達点を示しているようです。

ここには、町の裏側にたたずみながら、自らも日々を過ごす桶川町に静かなまなざしをもって徳松氏が見いだした確かな美があります。

27　騎西屋

26　相摸やの裏より 村宗旅館の北側を望む

## 水彩画と新たな風景の発見

武村徳松氏が水彩画によって描いた風景は、近代日本の姿を象徴する東京駅や王子の製紙工場と、日本の大自然を描いた作品がともにあります。

対象的に見える画題ではありますが、ともに近代日本の確立期を生きた青年の心象を伝えるものではないでしょうか。

29　王子町

28　鍛冶橋

34　伊豆西海岸

31　徳本峠ヨリ　日本アルプス

### 参考．水彩画の流行と風景画

明治期の水彩画の流行は明治34年（1901）に刊行された水彩画の手引書『水彩画之栞』によって始まり、大下藤次郎が著したこの本はたちまち15版を重ねました。

彼は、全国を歩き、尾瀬沼、猪苗代湖、十和田湖、穂高岳など、日本の風景の新たな魅力を水彩画によって広く伝えました。

青年期の徳松氏も絵筆をとって旅立ち、心を癒やす風景を探し求めたことでしょう。

参考　大下藤次郎の作品《穂高山の残雪》

### 参考．雑誌『みづゑ』について

明治30年代頃から始まる水彩画の流行の中で、大下藤次郎によって明治38年（1905）に水彩画の専門雑誌『みづゑ』が創刊されます。

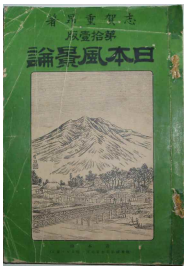
わかりやすい記述と複製効果の高い多色印刷を目指していた『みづゑ』は、独学で水彩画を学ぼうとした徳松氏にとっても良き師であったことでしょう。

### 参考．『日本風景論』

志賀重昂によって明治27年（1894）に政教社より刊行され、15版を重ねた明治期のベストセラーです。本書は、日本風景の賛美にあふれており、日本独自の風景美を自覚的に発見することを説いています。

大下藤次郎による水彩画の普及活動とともに、この時代を生きた青年の思想に大きな影響を与えました。

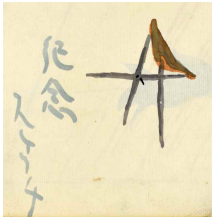
参考『水彩画 みづゑの魅力 明治から現代まで』

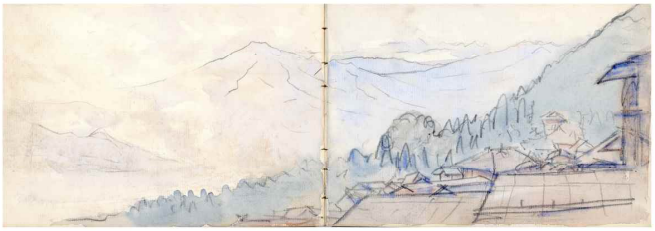


## 徳松氏の旅　－スケッチブックから－

徳松氏にとって、水彩画を描く歓びは、旅とともにありました。武村家には、写生行に携えたスケッチブックが保存されています。

これを開く時、旅にあって飛躍する明治大正期の青年の心が伝わってきます。




36　スケッチブック

徳松氏は、少年期の画帖の一隅に三脚（折りたたみ椅子）を描いていました。

同型の三脚を水彩画の指導者であった大下藤次郎も愛用しており、『みづゑ』をとおして大きな影響を受けていたことが伝わってきます。

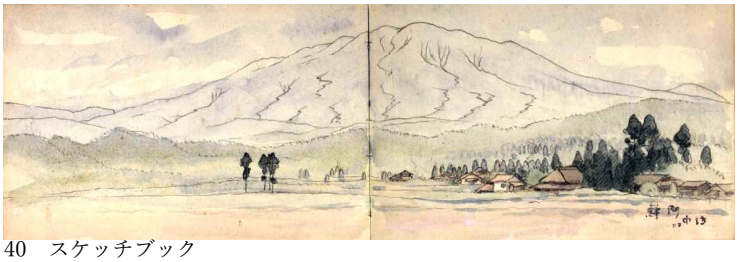
37　スケッチブック

38　スケッチブック

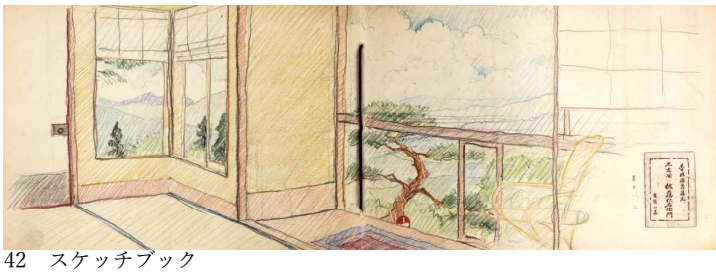
## 徳松氏のスケッチブック

昭和に入ると、徳松氏の作品はほとんど見られなくなります。旅館業や町の活動等多忙な中、筆を置いたと思われます。

しかし、武村家には21冊のスケッチブックが残されています。徳松氏は、日々の感動をすばやく写真のように絵におさめています。そこには、昭和に入ってもなお旅を続ける徳松氏のまなざしが静かに息づいており、迷いなく鉛筆を走らせて水彩を重ねていく率直な表現を見ることができます。



40　スケッチブック



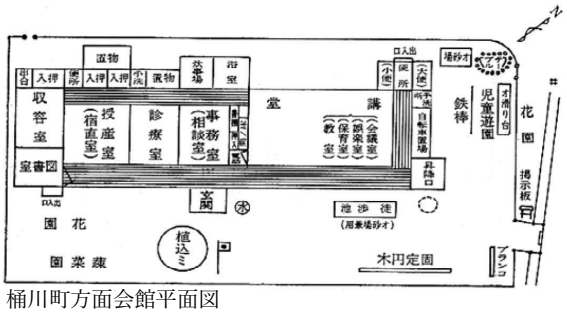
42　スケッチブック

41　スケッチブック

## 徳松氏と桶川の社会教育

昭和12年（1937）３月１日、今の桶川公民館がある場所に社会福祉施設として、桶川町方面会館が開設されます。その方面委員に徳松氏は名を連ねています。

桶川町方面会館は、方面委員等の熱意によって運営され、住民の生活改善に多くの実績を残しました。当時、桶川町の誇るべき施設として注目され、昭和15年（1940）には全日本方面委員連盟から顕彰されました。



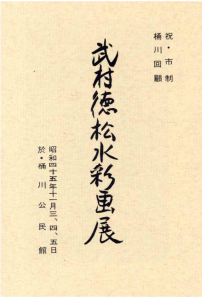

桶川町方面会館平面図

戦後、方面会館の事業は桶川公民館に引き継がれ、徳松氏を含む関係者の努力と、住民の文化的欲求の高まりを背景とした活動により、昭和25年（1950）11月には埼玉県優良公民館として表彰されています。

## 武村徳松氏と桶川の街

昭和45年（1970）11月３日～５日に、桶川市制施行祝賀行事として、「武村徳松水彩画展」が桶川公民館にて開催されました。

昭和45年12月15日の埼玉新聞によると「出品された作品の多くは、風景になった家の人にやったりして、ほとんど貸してもらっての作品展だった。」とあります。徳松氏を慕う人びとが、街の人びとの手にあった作品を集めて作品展を開催したのです。




44　武村徳松水彩画展パンフレット

45　県展 埼玉会館にて　中央が徳松氏

桶川に来たばかりのころ、絵を描くことを心の慰めとする青年であった徳松氏は、やがて旅館の主人として人々と交流を深め、その人柄から福祉や社会教育を支える役割を果たしてくれました。

徳松氏が、主人として守った江戸時代の旅籠の伝統を引き継ぐ旅館は現在もご子孫によって引き継がれ、その建物は中山道桶川宿の面影を伝える文化財として、国登録有形文化財となっています。

武村旅館（国登録有形文化財）

# 内田静馬氏と木版画

桶川市内では、年配の方のお宅に資料調査に伺うと、壁に木版画が掲げられているのをよく目にします。木版画家内田静馬氏の作品です。

静馬氏の木版画のテーマは、身近な風景、野菜や果物を盛った静物、大津絵、絵馬などの民画などさまざまです。静馬氏のまなざしは日常生活でつい見過ごしてしまうような素朴なものに「美」を見出し、自らが描き、彫り、摺るという技によって版画作品に昇華していきました。

幼いころから絵を描くことが大好きであったという静馬氏は、若き日は教師として工芸の美を生徒に伝え、晩年は自宅で木版画教室を開き、公民館の木版画サークルの講師をつとめ、さらには、版画の技法書を著し、描くことの楽しさを多くの人びとに伝えました。

48　雪の日

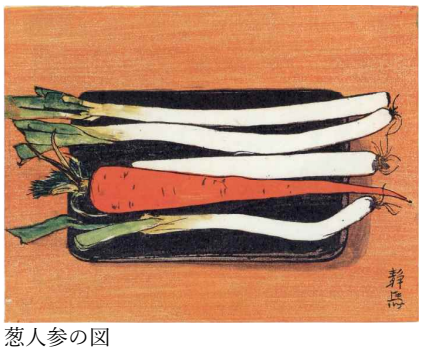
## 木版画家としての第一歩

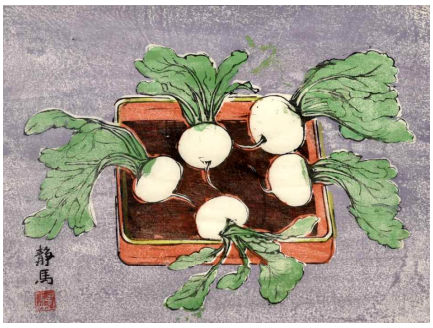
内田静馬氏は、明治39年（1906）に川田谷村の内田家の長子として誕生しました。この年は丙午にあたり、気性が荒くなるという俗信から、無事に成長するようにと「静馬」と命名されたそうです。内田家は、かつて荒川の太郎右衛門河岸にあって荷場の屋号をもち、舟運とかかわる家であったと伝えられています。

静馬氏は、幼少のころから絵を描くことを好み、旧制川越中学校を卒業後、東京美術学校への進学を希望したそうです。父親の許しを得ることができず、大正13年（1924）に、芝浦にあった東京高等工芸学校に入学しました。静馬氏は、木材工芸科に入学し、家具製作の技術を学び昭和２年（1927）に卒業します。

46　卓上の雑器

翌年、昭和３年（1928）の第８回日本創作版画協会展に《あづさ川の源》、第６回春陽会展に《葱人参の図》《朱面絵馬》が相次いで入選します。こうして、静馬氏は版画家としての一歩を踏み出したのです。


葱人参の図


47　かぶ

## 戦前の創作活動

昭和５年（1930）に、生家のある川田谷を離れ、新潟県立高田商工学校（現新潟県立高田商業高等学校）に木工教諭として赴任します。同時に結婚し、昭和７年（1932）には長男も誕生し、旧城下町の高田（現　上越市）で静馬氏は精力的に創作活動に励みます。

昭和９年（1934）、パリで開催された「日本現代版画とその源流展」（以下パリ展）に４作品を出品し、≪海水浴場≫が、パリ国立図書館版画部に買い上げられたのです。パリ展での成功は、静馬氏に自信をもたらし、創作意欲を高めたことでしょう。

49　雪の高田市 新日本百景選

50　海水浴場

とくに、出品した４作品の内、≪海水浴場≫が唯一の風景画であったことから、以降の静馬氏の作品は、静物画から風景画へと画題を移し、高田市周辺の風景を描いた作品をたくさん制作しています。

昭和14年（1939）には、山口県の下関市立下関商工学校（山口県立下関中央工業高等学校）に転任し、下関市に移り住みます。

しかし、日中戦争から太平洋戦争と続く戦時下にあって、静馬氏は、軍事戦略上重要な位置を占める下関の風景を描くことが困難となり、版画とは距離を置かざるを得なくなったのです。

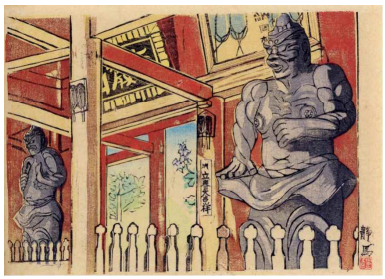
## 桶川町川田谷から再出発

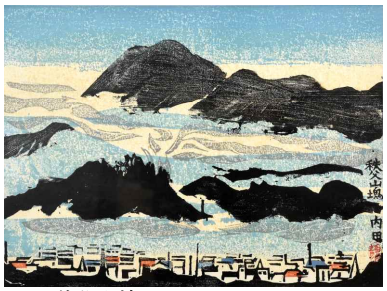
昭和20年（1945）、終戦を間近に、静馬氏は、埼玉県立川越工芸指導所長を命じられ、生家のある川田谷に戻ることになりました。静馬氏は中学生当時のように川田谷と川越を行き来する生活を送り、高田で生まれた長男の紀成氏も静馬氏の母校である旧制川越中学に入学しています。

終戦後、銀座の家具会社に転職します。この時期は仕事に家庭にと多忙となり、版画制作の形跡はみられません。

昭和35年（1960）４月に、棟方志功らによって版画家の団体「日版会」が設立されます。同年８月には創立第１回展が開催され、静馬氏は、川田谷の古刹泉福寺を描いた≪仁王門≫を出品して入選を果たし、同会会友に推挙されました。

こうして、ふるさと川田谷の生活の中で創作活動を再開した静馬氏は、昭和40年（1965）３月、退職を契機として制作にさらに熱中するようになり、万葉集をテーマとする連作など、晩年の活動を充実したものとしていきます。


仁王門


54　秩父山塊

51　東照宮

62　二子山古墳

52　霧の朝

55　時鳴鐘

57

59

61

『萬葉東歌 内田静馬木版画第三輯』より

## 民画に向けるまなざし

内田静馬氏の作品の中には、絵馬を写した作品や絵馬のある風景を描いたものが見られます。絵馬を題材として描く時、その図柄や形だけではなく、板面の木目まで詳細に版画の技術を駆使して再現しています。さらには、大津絵、絵馬、陶片に描かれた絵をモチーフにした版画も残されており、庶民が暮らしの中で生み出した美に深い関心を寄せていたことがうかがわれます。

静馬氏は、昭和53年（1978）に『日本の民画』（理工学社刊）を著しています。民画を正しく健康な工芸品としてとらえ、すぐれた民画を数多く残してくれた多くの無名の画工たちに深い敬意を払っていました。

71　馬

65　鴻巣 三ツ木神社 絵馬

63　蓮田 みみだれ観音堂 鶏の図

70　地口燈籠

72　南蛮貿易絵馬

「子供のころ、鎮守の宮の参道にいろいろな極彩色の絵を描いた灯籠が立ち並んでいたのをなつかしく思い出します。（中略）ローソクのやわらかな光を通して見た幼い頃の思い出が、この地口灯籠からよみがえってきます。」

『日本の民画』より

## 桶川の人びとととともに

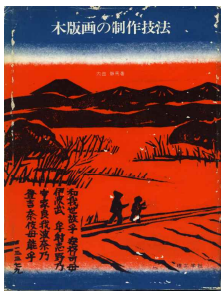
昭和43年（1968）から昭和51年（1976）まで、静馬氏は桶川町（市）から委嘱されて川田谷公民館長をつとめています。この職をとおして、静馬氏は桶川の人びととの交流を深めていきます。同じころ、明治大正期の桶川にあって水彩画を描いた武村徳松氏の息男である武村昌一氏は桶川公民館長をつとめていました。

その縁から二人は親交を深め、互いに連れだって旅をし、昌一氏は風景を写真におさめ、静馬氏はいつも携えている矢立てと絵の具で折り帳にスケッチしていたそうです。今も武村旅館の玄関には、静馬氏から贈られた版画が飾られています。

73　武蔵桶川宿駅之図　内田写

教師として経歴をもつ静馬氏は、『木版画の制作技法』（1972　理工学社刊）を著し、木版画の普及にも力を注いでいます。桶川にあっても、加納公民館主催の版画教室の講師をつとめ、市民が結成した版画制作サークル「木葉会」の指導を最晩年まで続けていました。その指導は、版画を楽しむことを第一とし、自らは手を下すことなく、版画に親しむ会員を見守っていたそうです。

83　武蔵野風景




74　木版画の制作技法

75　木葉会制作カレンダー

82　すもも咲く武蔵野

84　晩秋の武蔵野

戦後の社会教育は、すべての国民に文化的教養を高めることができる機会と環境を提供することを目指してきました。桶川の公民館活動においても、さまざまな人が出会い、互いの個性を尊重する中で多くの文化活動が生まれています。

内田静馬氏は戦時中に創作を自ら停止した経験をもっています。その静馬氏が公民館にあって市民の芸術活動に向き合う姿は、「表現は自由」という深い思いを体現されたものだったのでしょう。

78　川田谷小学校史


—協力者—

今回の企画展を開催するにあたり、貴重な資料を出品していただいた市民の皆様、ご指導をいただきました機関ならびに研究者の方々に対して、厚く御礼申し上げます。

武村祐介　武村ひろみ　内田紀成　野口和子　秋山弘子　秋山有世　小川和雄
折井貴恵　棚橋幸子　成田繁　橋本富夫　林宏一　矢部丈吉
桶川市文化団体連合会　桶川市立川田谷小学校　川越市立美術館　川田谷松原区

［順不同　敬称略］



**令和２年11月１日　桶川市歴史民俗資料館　館長　粒良紀夫　　文責：紅谷有美**